

帰る国を失った難民に寄り添い、平和に寄与する活動に
皆様のご参加をお願いいたします



東ティモールで援助物資を運ぶ ©UNHCR

難民救済に特化した最も国連らしい機関 国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)を 広報と募金活動でバックアップしています



日本UNHCR協会
「国連難民高等弁務官事務所
(UNHCR)国内委員会」理事長

赤野間 征盛 氏

あかのみ ゆきもり
日本UNHCR協会(国連難民高等弁務官事務所・国内委員会)理事長。早稲田大学卒。カリフォルニア大学大学院留学。講談社インターナショナル編集長などを歴任。出版生活40年の国際派。米国滞在歴は通算6年、出張先は45カ国に及ぶ。米ニューオーリンズ名誉市民。

多い。01年には、米国女優アンジェリーナ・ジョリーが親善大使となり、シオラレオネやカンボジアなど20カ国以上を訪問している。

協会は、この活動をバックアップしようとして、民間の公式支援窓口として00年10月に設立された。現在はNPO法人。別名、UNHCR国内委員会。UNHCR駐日事務所と連携する。フランス、イタリアにも同様の国内委員会がある。

赤野間理事長は発足時に就任。出版人として国際的に活躍する過程で国連とも近しくなった。

「難民救済に特化している点で、UNHCRは目的が明確。最も国連らしい機関です。職員はすぐ現場に飛んでいく。頭が下がります」

協会の使命は、基本的には広報と募金活動。年間1000億円の本部通常予算のうち、約1割の約100億円を民間から拠出するのが目標だという。「世界で何か大災害などが起きると、我々は即、ロータリークラブなどと協力を求める」と話す。

今、協会がサポートの必要を痛感しているのは、アジアの難民たちだ。ミャンマーやブータンからの難民、そして中国・四川省の大地震による被災者……。ミャンマーでは、UNHCRは90年代初頭から援助活動をしてきた

冒頭で紹介した「サダコ」は、第8代の元国連難民高等弁務官(就任期間1991〜2000年)の緒方貞子さんに由来するらしい。ほかにも「マサコ」「ユミコ」など献身的に働く日本人女性職員の名を授かった難民の子どももいる。

「日本の女性の力はすごい。難民の心に寄り添って仕事をしているからです」

国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)は1950年に創設。紛争・迫害で故郷を追われた難民保護などを目指し、難民の自主的帰還、庇護国や第三国への定住に尽力する。活動資金はほとんど各国の任意拠出金と民間の寄付に頼る。過去、5千万人を支援。現在、職員約6300人が110カ国以上で活動。援助対象者は約3170万人(07年末現在)。難民や国内避難民が多く、地域はアジア、アフリカなどが

め、サイクロン被害発生後、すぐにUNHCR職員70人が派遣され、蚊帳、生理用品、毛布、テントなどを被災者に支援。このたびの四川大地震では、1万5000張のテントを渡した。

「難民とは、この世で最も不幸な人たちと言わざるを得ない。帰る国がないのですから。ただ、不幸だけれども、別の人と思ってはならない。同じ人間なのです。難民のためにではなく、難民とともに、と信じてつづけている。援助する側も、される側から勇気やたくましさをもたらしているのです」という。手から手への支援。それがUNHCRや協会のロゴマークにもなっている。

「例えば、クリスマスプレゼントを渡す時、男性が女性にこう言うのです。『君の名前でUNHCRに500ドル募金したよ。その感謝状を贈る』と。こんなインテリな男性と、それを受け入れるエレガントな女性が増えてくれればいいのですが」

イベントやゴルフコンペをチャリティの概念と常に結びつけることも提唱する。

「社会があり、収入を得て生活できる。これが当たり前の人たちが少しでもお返しをする。愛とは与えることです。普通に生きられることに謙虚になり、感謝する。欲望を抑えることで、解決する問題もあるのではないかと思います」

「サダコ」と日本名で呼ばれ、振り向いた子どもの肌は黒く、瞳は希望に輝いている……。難民を支援する国連難民高等弁務官事務所で働く日本人の献身ぶりの証左だろう。日本UNHCR協会は、この事務所を支える日本の民間組織。赤野間征盛・協会理事長に、その役割を聞いた。

取材・文／相良あき

クラブ・コンシェルジュ 5周年記念チャリティーガラ・ディナーの収益金をアジアの難民救済に寄付させていただきます



ネパールのブータン難民キャンプにて。多くの老人も難民として避難生活を続けている ©UNHCR



生まれてまだ10日の赤ちゃんを抱いて避難している中国・四川大地震の被災者 ©UNHCR/N.Behring



伝統的なショールを織る、ネパールのブータン難民女性 ©UNHCR



スリランカの国内避難民の親子。スリランカの和平までの道のりは厳しい ©UNHCR/G.Amarasinghe



UNHCRの仮設テントで東の間の休息をとる東ティモール国内避難民の親子 ©UNHCR